



年間テーマ ～ 平和を目指してともに歩もう ～



地上でもっとも小さいといわれている種子、
それがシナピス(からし種)です。
イエスは神の愛がすべての人におよび、
互いに尊重し合い、
愛し合うように願って平和の種をまき、
やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると
約束しました。

カトリック大阪高松大司教区
社会活動センター・シナピス

TEL/06-6942-1784 FAX/06-6920-2203

Email/sinapis@osaka.catholic.jp

ホームページ/<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

タイトル: 「平和への願い」

作: 村瀬 葵

(セントヨゼフ女子学園高等学校)

第2回シナピス主催絵画コンテスト
ピース賞 受賞作品

巻頭言

社会活動神戸センター 木谷 公士郎



この巻頭言を書いている 2 月 15 日現在、パレスチナ・ガザ地区南端ラファに対してイスラエル軍は苛烈な空爆を行い、地上侵攻が目前に迫っているという状況になっています。

ガザ地区全体の面積は 365 平方キロ、この近辺でいえば大阪市と堺市を足したくらいの広さになりますが、そこに 200 万人の人たちが暮らしていました。

その南端のラファの面積は 33 平方キロ、同じ南端ということでは、堺市南区（40 平方キロ）よりも少し狭いくらい、そこに 130 万人から 140 万人の人たちが避難してきています。イスラエル軍の攻撃によりガザ地区全体は文字通り瓦礫の山となっており、ラファ以外にはどこにも逃げ場がない状態です。

人道支援の窓口ともなっていたラファ自体が包囲・攻撃されることにより、最低限の支援物資の供給も困難となり、ガザ地区は既に空前の人道危機にさらされており、この上地上侵攻ともなれば、どれほどの被害が生じるのか、それをどのように表現すればよいのか、最悪の上に最悪が重なるような悲劇的事態が生じるのは想像にかたくありません。

ラファで医療活動に携わる医師は、13 日に自身の SNS で「爆撃を受けたり、今いる場所が壊されたりしたときに、私たちが誰であるかが分かるように、子どもたちや家族の手首と足に名前を書きました。けれどもこんなことは意味がないかもしれません」とその厳しい状況を記し、さらに続けて「私は生き延びていますが、心の中ではそうではありません、毎秒生き抜くこの苦しみは早く終わることを願っています。毎夜泣いています。日々、状況は厳しくなるばかりです」と痛切な思いを発しています。

すでに国際司法裁判所は、1 月 26 日ガザ地区の状況を「壊滅的な人道的状況」にあるとし、イスラエルに対してジェノサイド的活動となる軍事行動を停止するよう命じています。

これまでも、そして現在においても、イスラエルの最大のうしろだてとなっているアメリカ・バイデン大統領ですらイスラエルの作戦は「行き過ぎ」だと明言し、聞く耳を持たぬネタニヤフ首相への苛立ちをつのらせていると報じられています。

日本政府を含め国際社会は一致して重大な懸念を表明しており、2 月 14 日にはフランス・マクロン大統領がネタニヤフ首相に直接電話し、ラファへの地上侵攻に「断固反対する」旨を伝え、ただちに作戦の中止と人道支援への協力を求めたと報じられました。

ジェノサイド、民族浄化、大虐殺といったもしい事態が目前に迫るなかで、戦後国際秩序を支えている国際法、「法の支配」の概念が、自制心を失った暴力に対しては全く無力であるようにみえます。

胸が痛み焦燥感にかられる、そのような思いは多くの人たちに共有されているのではないのでしょうか。しかしそれでも「自由、民主主義、基本的人権の尊重、法の支配といった普遍的な価値を擁護し、共存共栄の国際社会」（「国家安全保障戦略」より）を希求するという立場をあきらめるわけにはいきません。

「いずれの国家も、自国のことのみに専念して他国を無視してはならないのであって、政治道徳の法則は、普遍的なものであり、この法則に従うことは、自国の主権を維持し、他国と対等関係に立とうとする各国の責務であると信じる」と書かれた憲法前文をもつ国の国民のひとりとして、せめて関心を失わず、声をあげ続けていきたいと思います。



年間テーマ

～平和を目指してともに歩もう～

身近なことから世界に至るまで、互いを思いやれないことで生じる衝突が後を絶ちません。剣を取る者は皆、剣で滅びる」(マタイ 26:52)と言われたイエスの生き方に倣い、暴力に打ち勝つ強い信念をもち、交わりを通して互いを理解し尊重しあえる平和の実現を目指します。

このニュースが皆さまと一っしょに考え、わかちあいの場となることを願っています。

釜ヶ崎体験学習報告

聖ヨゼフ学園 京都暁星高等学校 教諭
稲葉 隆司

12月25日（月）と27日（水）に事前学習を経て、2月3日～4日に3年生4名と教員3名で釜ヶ崎体験学習に行きました。



私たちの主な活動は、炊き出しと夜回りでした。炊き出しは、毎週土曜日に行っている釜ヶ崎高齢日雇い労働者の仕事と権利を勝ち取る会（通称：勝ち取る会）に今年もお世話になりました。

この日のメニューは、鶏肉・人参・大根・じゃがいも・玉ねぎの入った栄養満点の丼で、生徒たちに与えられた作業は野菜切りでした。大根は倉庫に保管しているときに凍っていたため、切るのに苦戦しましたがなんとか無事に終了しました。

配食前に「おじさんたちに配る前に、味見をしてほしい」ということで、それぞれが少しずついただき、11時半から配食が始まりました。

リーダーの“コチさん”から係を割り振られ、2名の生徒が最前列で丼を配り、1名の生徒はご飯をよそう係に、残りの1名は食器を洗う場所に配置されました。



この日並んでいた方は267名で、290食（＋野菜のみ151食）を配りましたが、生活保護受給日直後のためか、いつもよりは人数が少ないという話を伺いました。

夜回りは、野宿者ネットワークの方にお世話になりました。①山王、②釜ヶ崎→心斎橋の2グループでしたが、山王では5名、釜ヶ崎では43名、心斎橋では13名の方と出会いました。

この日はカイロと水と乾パンを手渡しながら、体調の確認やお話をさせていただきました。

野宿者ネットワークの方が声をかけられると、気さくに会話をしてくださる様子を見て、長く継続されてきた活動の成果を肌で感じました。

また、野宿者の方とお話をする中で、「これから若者の時代や！ 頑張れよ！」と逆に励まされました。





前列中央：本田哲郎神父様とビスカルド篤子さん

2日目は、「ふるさとの家」で長年支援活動されているフランシスコ会の本田哲郎神父様のミサにあずかり、ここでなんとシナピスのビスカルド篤子さんと偶然の出逢いがありました！

私たちは初対面でしたが、かつて本校でお世話になっていた方でいつかお会いしたいと思っていたので、本当に嬉しい出逢いでした。

その後、聖母被昇天修道会のシスター・マリアからお話をいただきました。

「日頃、物を持ちすぎている私たちは、本当に満足することを知らない。釜ヶ崎の人たちは互いに分け合って生きている。喜びを分かち合うと喜びが倍になることを知っている。苦しいことを味わっているから、人の苦しさも共感できる」。

シスターの熱い語りに圧倒され、今後の私たちの生き方について考えさせられました。

【生徒の感想（抜粋）】

○釜ヶ崎体験学習に参加したことで、自分は野宿している方々のことを全然知らなかったということを知りました。自分の住んでいる地域では野宿している方を見かけないことや、新聞よりもテレビニュースを利用して情報を集めていることもあって、福田さんや生田さんの話には驚くばかりでした。

○1日目に炊き出しの手伝いをさせてもらって、配食から後片付けまで現地の方と協力してやって思ったのは、野宿者の方々が炊き出しのものをもらうときに、「ありがとうございます」、食べ終わった後「ごちそうさま。おいしかったです」など感謝の一言を添えてくれてたし、目を見て言ってくれて、すごくイメージと違うなと思いました。でも、炊き出しには250人以上並んでおられて、まだ250人もの方々が炊き出しを必要とせざるを得ない状況に置かれているんだと胸が痛みました。

○夜回りに行く前に生田さんという方に話をしてもらった時、野宿者が若者に襲われている実態や男性だけでなく女性や子どもまで野宿者になっていることなど、本当に日本のことなのかと疑うことの数々でした。その後の夜回りでは、僕達のルートでは5人とだけ出会ったけど、みんな「ありがとう」と言ってくれるし、最初会った方とは、社会の話とか、哲学的な話をしてもらって、最後には「頑張って」と言ってもらって、なんでこんなに温かくて優しい人達がこんな生活をしないとイケないのかと悲しくなりました。

○シスター・マリアの話を聞いて印象に残ったことは、「弱者ではなく、弱い立場に追いやられた強い人」ということです。夜回りをしていて、野宿している方に物資を渡す際に、近くの別の野宿している方に「そっちに渡してあげて」と言っていて、自分よりも他の人のことを思いやっていて強い人だなと思いました。だからこそ、シスター・マリアの言っていたことは的を射ていると思い、印象に残っています。



小さくされた者の側に立つ神

シナピス発 祈りのとき
～ 心が すさまじいように 福音にふれる会 ～
本田神父をお招きして

福音には、イエスの軌跡が書かれています。

イエスは、心がふるえ、はらわたをつき動かされて、その人にかけよった…。

そんなイエスの生き方に「少しでも倣いたい」と、私たちは日々願いながら過ごしています。

社会の中で、人に交われば交わるほど、心を揺り動かされる出会いを体験するのですが、日常生活にあまりに忙殺されますと、だんだん心が渴いてくるような、ささくれ立ってしまうような、殺伐とした感覚に覆われてくるものです。

そうして、心の中で「福音に触れたい」、「声を聴きたい」との思いが強くなってきます。社会活動センターでは、そんな声をよく聞きます。

そこで昨年の12月7日（木）、社会活動センター主催で、フランシスコ修道会の本田哲郎神父さんをお招きして、“福音にふれる会”を開くことにしました。

思い立ったのが急で、時間設定も平日の昼間だったにもかかわらず、20名近くの参加がありました。また、「都合をつけられず、残念だった」との声も聞かれましたので、近い将来、第二弾を企画します。どうぞお楽しみに！ （ビスカルド篤子）



参加者のひとくち感想

☆本田神父様とお話ができて嬉しかったです。神父様らしい神父様でした。

小生の悩みをしっかり受け止めていただけたと思います。

久しぶりにほっとした思いでした。（加納 寿人）

☆ずいぶん昔、学校に本田先生をお招きし、お話をいただいたことがあります。お礼の手紙を出したところ、「自分は迷いなく進めているが、実は若い人に向かって働く現役の人の方が大変です」というお返事をくださり、大変嬉しかったことを覚えています。

低いところに立って、そこにイエスがいると教えてくださったけれど、お年を召してもその生き方を貫いておられるのだと思いました。帰ってから、お話を聞きに行ったら良かったと、さらにしみじみ思いました。（元教員・田中 純子）

☆15年程前、京都の「フランシスコの家」で行われた本田神父さんの講演を聴くために、当時小学生だった孫を連れて出かけました。「自分の所属教会では、こんな質問はできない…」と悩んでいたことにも、きちんと答えていただき、安心して心を開くことができる神父さんだと思いました。今回も、そんな体験をしたい気持ちで参加させていただきました。



本田神父さんの「福音にふれる会」に参加して



シナピス事務局 山田 直保子

本田神父さんには初めてお会いしたのですが、とても人柄がにじみ出ているようなお顔で、安心するような雰囲気を出されているような方でした。

**「わたしがあなたがたを愛したように、互いに
愛し合いなさい。これがわたしの掟である」**
という聖書の一文。

新約聖書では愛という言葉に、「エロス」、「フィリア」、「アガペ」と箇所によって使い分けられているようで、この箇所には「アガペ」というギリシャ語が使われています。

その意味を、本田神父さんは「大切にする」と説明されました。

私はとてもしっくりくるこの言葉に、なぜか涙が止まらなくなりました。

なぜ泣いているのかと聞かれても、答えられない何かが私の心を溶かしたようでした。

「自分を大切にする」、「互いに大切にする」。まずは、自分を大切にすることによって、相手も大切にできる。自分を犠牲にしても相手のことを考えることが美談のように伝えられることもあります。そうじゃなくてもいいんだという考えさせられました。

「隣人を自分のように愛しなさい」ではなく、「隣人を自分のように大切にしなさい」。

「互いに愛し合いなさい」ではなく、「互いに大切にしなさい」など、愛と訳されているところは、「愛しなさいではなく、大切にしなさい」と言われたことが、私の心に響いたのです。

聖書って、自分のその時の心の状況によって、感じ方が変わりますよね。

本当にこのことが不思議で、何度も同じ場所を読んでは、「あっ！前はこう思ったけど今日はもしかしてこういう教えではないのか？」と思い直したり…。

ギリシャ語の訳も、神父さんの言葉の魔法で良くも悪くもなる。だからこそ、いろんな見解を聞いて自分自身で勉強を怠ってはいけないんだと思わされたと同時に、もっと聖書を知りたいと思いました。





「福音にふれる会～本田神父をお招きして」に参加して

シナピス運営委員 西口 信幸

昨年12月7日（木）、釜ヶ崎「ふるさとの家」の本田神父さんが、シナピス事務局の職員のために、「みことばを通して出会う人々との交わり」を語る集いを開いてくださいました。

せっかくの機会ということで、シナピスに関わりを持つ人、十数人もいっしょに聞かせていただきました。

簡単な自己紹介のあと、最初の言葉が「持って来る聖書を間違えた」と・・・少し元気をなくされた様子でしたが、かえって人間味のある、優しさに触れて、和やかで温かな時をいっしょに過ごすことができました。

聖書のことばをもちいてお話をされましたが、一貫して語られたのは、「目線を低く」して、接する人を「大切にすること」だけで、「その場で、すでに神に愛される恵みを受けている」という言葉をいただいたことで、私たちもそこに教会の交わりがあり、聖霊の恵みを受けて、またシナピスの活動に入ることができるのだと、希望と勇気をいただくことができました。

☆第二バチカン公会議で告げられた「option for the poor」

私たちはその人たちの視座を共有し、貧しい人たちに渡すべきものを渡しているか？
貧しい人たちを優先しましょうという解釈をし直し、どう関わっているのか、
貧しい人のプライドを忘れて関わっていないか？改めて見つめ直したいことです。

☆「愛」について

「愛」アガペは「お大事に」「大切にすること」、だれでも愛さなければならない、という姿勢で臨みますが、相手だって選ぶ権利があるんだという目線を忘れているかも知れませんね。相手を人として尊厳を認めること、まず「自分自身を愛しているか？」
問いかけてみたいことです。

☆「救い」について

真実はあなたたちを自由にする。そして、信仰があなたたちを自由にする。
「あなたの信仰があなたを救った。」イエス自身がおっしゃったことばです。
イエスの奇跡では、パンを増やしたことではなく、分かち合いを促されたことに目線を向けることが大事なのかも知れません。

☆「今、ここで」 Hic et Nunc

「きょう、キリストが生まれた。」 Hodie crismatus est
「今日こそ神が現れた日、喜びうたえ、この日をともに。」
『今』聖霊によって、この供えものを尊いものにしてください。
キリストはまだ来ていないのではない、ずっといっしょにいてくださっています。

☆メタノイアの洗礼 悔い改め

底辺から見直す。ガリラヤ湖から流れるヨルダン川、その一番低いところにある死海の側でイエスは洗礼を受けられました。
低くされた側の視座で見ることを教えてくださいました。

いただいた言葉を整理していて、本田神父さんが一貫して、下からの目線を大事にして生きておられる、その生き方に、私たちも癒されて、その場で、その時を、ともに過ごせたと実感します。また、こういった時を持てればと願いながら、平和のうちに別れました。

祝!! 日本で生まれ育った仮放免の青少年たちに在留特別許可が出ました



「夏休みが終われば、あなたたちをペルーへ強制送還する。」入管の取調室で、ペルー人の高校生と中学生のきょうだいが、そう宣告を受けたのは 2017 年 7 月のことでした。

日本で生まれ育つこどもたちに国外退去を命じるとは。私たちは、日本政府が国際規準に則^{のっと}って「こどもの権利」を守るよう声をあげることにしました。

母子の窮状を知った人たちが、それぞれ知恵を絞^{ひね}ってできる支援に乗り出し、みるみる「支え合いネットワーク」は広がってゆきました。塾に行けないこどもたちの勉強を見る人、破格の家賃で住まいを提供した人、裁判の傍聴^{ほうちやう}に出向く人、毎月義務付けられる入管への出頭につきそう人。こどもたちが犯罪者呼ばわりされ、苛められたと知れば私たちは学校へ飛^とんで行き、母親が病気になれば病院へ同行しました。そして何よりも母子の生活費や教育費を援助した数知れぬ人びと!



あれから 7 年の月日が流れ、姉は大学卒業間近、弟は大学 2 年を終えようとしています。

そんな 2024 年 2 月 16 日、入管から呼び出しを受けたきょうだいが入管へ出頭すると、ふたりは 7 年前に強制退去の宣告を受けた同じ取調室に通されました。そこで担当官は「退去強制処分命令を取り消す」と告げ、遂に二人に在留特別許可がおりたのです。

生まれて 20 年あまり、「いてはいけない存在」として常に生存権を脅かされていたきょうだいが、その重い足枷^{あしかぜ}から解放された瞬間でした。在留カードを手にしたこどもたちに、私たちは力いっぱい拍手を送りました。

まだ母親が仮放免のままです。私たちは法務大臣に再審の願いを続けていますが、この春からは就職の決まっている姉が一家の大黒柱となって働き、弟も許される時間内でのアルバイトをして支え合って生きてゆけます。

昨年 12 月には、同じくシナピスで支援していたスリランカ人の親子に在留特別許可がおりました。今、母親は得意の裁縫を生かした会社に就職でき、高校一年生の息子はアルバイトをしながらバスケットボール部で生き生きと学校生活を楽しんでいます。

再定住の道のりは、先の見えないトンネルに入り込んで、何年も這^はいつくばって進むようなものです。支援する私たちもまた当事者と手を取り合って、手探りで壁を伝い、励まし合いながらトンネルのなかを漸進^{ぜんしん}します。「もうあかん」と萎^おえる時もありますが、しつこく行動しつづけると、何とかなる日がくるのだということを改めて学びました。

また元気が出てきました。さあ、エンジンふかして他の人たちの解決に向けて進むぞ~!

(ビスカルド篤子)





「在留特別許可」おめでとうございます！

日本で生まれ育って20年以上、住民票も、健康保険証も無く、許可なく県外に出ることもアルバイトも許されない生活をしてきた M さんと S さんに、「在留特別許可」がおりました。2月16日のことでした。

残念ながらお母さんの「在特」はまだいただけていませんが、若い二人の未来に道が開けたことが、ご本人たちはもちろん、このご家族の「在留特別許可取得」を応援して来た人たちにとっても、嬉しい嬉しい知らせでした。

阪神地区・夙川教会では、このご家族を励まし応援してくださっていた故・梅原彰神父さまの追悼ミサ（2月23日）に、「ウメハラ神父さまはお父さんのようだった」と敬意と感謝の思いで駆けつけた M さん、S さんとお母さんを囲んで、追悼ミサ後にささやかなお祝い会を開きました。追悼ミサの主司式をしてくださった酒井司教さまもお祝いのことばをくださり、会場は喜びの笑顔でいっぱいになりました。

酒井司教さまは、「仮放免状態のお母さんが、在留特別許可をいただけるまで一緒に応援しましょう！」と励ましてくださいました。



お祝いのことばと、「お母さんの在留特別許可が出るまで、一緒に今後も応援しましょう」と呼びかけられる酒井司教。

いつも温かく応援・支援してくださり、この「お祝い会」の準備をしてくださった夙川教会の社会活動委員会の皆さんと。





「在留特別許可」が出た直後に、大阪入管の前で、喜びの記念撮影！
駆け付けた「ぬくもり」の会の皆さんと。
2月16日。



今の気持ちを書いていただきました。

姉Mさん：「在特（在留特別許可）もらえるよ！」というお話をビスカルド篤子さんからお聞きしても、ピンとこなくて、本当におりるまでは「もらえないのではないか・・・」と気分が沈んでいました。

でも、実際「在特」がおりて、「仮放免の申請書」が無くなった時に、「もう私は多くのことに縛られることはないし、もう日本から連れ出される心配はないんだ」と思いました。

今では、「これから何をしようか」と未来を考えることができるのが、とてつもなく嬉しいです。これも多くの方が支えてくださったおかげです。あとは、母の「在特」を勝ち取るまで、この一歩を大事にしていけます。

引き続き応援していただけますと、大変うれしいです。これからも頑張ります！

弟Sさん：「在留特別許可」をいただけて、改めて非常に嬉しいと共に、支援者の方々に感謝の気持ちでいっぱいです。「在留特別許可」をいただくために行ってきた様々な活動がやっと報われたという気がしました。また、「在留特別許可」をいただけたきっかけを作ったのは、すべて母の行動力だと私は考えました。

私は大学に入り、多くの人と関わる中で気づいたことがありました。それは身近な人の行動力・意欲に、人（自分自身）は影響されるのだということです。

私は「下の子」という立場で、多くの人に“この問題”から守られてきました。正直、私は“この問題”に対して、とても辛い過去があったので、知りたくもないし、何もしたくない気持ちでいっぱいでした。

また、支援者や周りの人からも支えられ、私が何もせずとも、“この問題”は解決するだろうと考えていました。けれど、“この問題”はそんな簡単なものではなく、母が一生懸命この問題に向き合っている姿を見て、「私もこの問題に向き合いたい」、「自身の境遇についてもっと知りたい」、「多くの人に知ってほしい」と考えるようになりました。

このことから、私は母の行動力があったからこそ、「在留特別許可」をいただくことができたのだと考えました。

支援者の方々が、多くの場面で支えてくださり、感謝の気持ちでいっぱい、どのようにお礼を申し上げていいのかわからないのですが、このきっかけを作ってくれた母に一番感謝を伝えたいです。これからは、母が少しでも休めるように、大学で学びながらアルバイトをして、次の目標である「母の在留特別許可のために」と、「父がまた日本で暮らせるために」行動したいです。

障がい者委員会より

「病者・障がい者とともに歩むミサと交流会」アンケート結果の報告

歩むミサ 2023 実行委員会



◎今年初めて、実行委員会形式で実施しました。

- ・若い人の参加があった。
- ・若い人が参加してくださって、嬉しかった。
- ・もう少し回数が多くても良かったのでは。
- ・実行委員へ当事者からの参加が少なかった。

◎広報関係について。

- ・インクルーイブのポスターは良いので、毎年使いたい。
- ・各小教区でのアナウンスがなかったところが多い。
- ・もっと早く小教区に届くようにした方が良い。

◎スカウトのみなさんに道案内をしていただきました。

- ・障害を持った友人が親切にさせていただいて、感謝されていた。
- ・スカウトの制服での侍者が良かった。
- ・スカウトへのお礼を言う機会がなかった。

※ スカウト参加総数 5教会1修道会 35人（内スカウト17人 リーダー18人）

- ・侍者：7人、侍者は、春名神父様 教区事務教区の花木さんの指導で、初めてのスカウトもなんとかできました。感謝いたします。（カトリックスカウト大阪支部）
- ・道案内：12:30~14:00頃まで、10人が「大阪カテドラル」の表示と⇒をもって立ちました。従事者の達成感は少なかったようです。

「来年は、駅の担当は必要ないのかも」という意見がありました。

スカウトは奉仕としての参加なので、皆さんとの交流も少なかったですが、ごミサに与れたことは感謝です。なお、案内表示は、来年も使えます。

◎ミサについて

- ・聖書の朗読箇所と聖歌はいつも同じで良い。※1、※2
- ・解説者と朗読者を当事者が担当して良かった。※3
- ・第一朗読に感動した。※4
- ・第一朗読もすごく良かった。当事者が奉仕してともに歩むのが実感できた。
- ・解説が、すごく良かった。心に響いた。

- ・団体や個人が担当した共同祈願について、それぞれの思いが伝わって良かった。※5
- ・宮永氏から、国際障害者の日の教皇メッセージの紹介があり、臨場感があって良かった。
- ・教皇メッセージを教えてもらって良かった。
- ・機械トラブルのため、代読でご本人の声が聞こえなく残念だった。
- ・宮永さん自身の声を拾えなくて、残念だった。※6

◎お茶の提供をしましたが

- ・皆さんが、個人で用意されていたので、来年はなくても良いかなと思った。

◎聖堂内の分かち合いについて

- ・筆談による分かち合いは良かった。
- ・若い人が考えた「宝物」というテーマも良かった。
- ・交流会に参加したかった。
- ・来年も今年と同じにすることにプラスして、最初に視覚障害者へのガイドの仕方を加えたらどうか。
- ・「ともに歩むミサ」に限らず、交流会を企画してほしい。
- ・視覚障害者用の時計やスマホなどもその時紹介したい。

◎司祭館集会所での分かち合いについて

- ・少人数ではあったが、内容は良かった。
- ・聖堂内の分かち合いだけでも良いかな？

◎その他なんでも

- ・たくさんの方の若い人の力添えに感謝したい。
- ・準備から実施のとりまとめ、意見交換、ファローなどの取り組みに頭がさがります。
- ・ミサに参加したくてもできない人たちのために YouTube と Zoom 配信を希望。
- ・ミサに与りたくても困難なのは、病者や障害者だけでなく、小さなお子さんを持つ親御さんなどもある。大阪高松大司教区となり遠隔地への情報保証も必要ではないか。
- ・一昨年、Zoom により正義と平和大阪大会を成功に導いたメンバーから、そのノウハウと有効性などを聞いた。

※1：第一朗読 コリントの信徒への手紙 12 章 12～26

※2：福音朗読 ヨハネ9章 1～3

※3：視覚障害者、

※4：肢体不自由

※5：力障連大阪フレンドリー、肢体障害者、カトリックスカウト、
神戸ダルクヴィレッジ、病者、精神・発達症（障害）自助グループオリーブの集い、
青年、視覚障害者、吃音発達症（障害）ノトケールの会

※6：教皇メッセージ翻訳者、肢体障害者、在宅で常時介護を受けている。

文責：障がい者委員会 よしかわやすお 吉川康夫

最初の新共同訳聖書完成の立て役者・太田道子氏のご逝去

和田 幹男神父



2024年1月2日、都内の桜町病院にて急性骨髄性白血病のため逝去。91歳。

1932年、プロテスタントの家庭に生れ、箕面学園、大阪女学院中学・高校を卒業、東京女子大学に進学、当時著名な聖書学者たちの薫陶を受ける。

大学卒業後、アメリカに留学。公民権運動の指導者M・L・キング牧師に直接出会う機会もあって、深い感銘を受けた。

帰国後結婚し、夫婦でエルサレムのヘブライ大学オリエント学部に留学。そこでローマの教皇庁聖書研究所で留学中の南山大学の三好迪氏と出会い、オリエント学では実績のあるローマの教皇庁研究所があることを知った。こうしてヒッタイト学のカメンフバー女史と同じアパートに住むこととなった。

それはちょうど第二バチカン公会議（1962～65年）直後のこと、教皇庁研究所も、女性にも門戸を開き始めたばかりであった。ちょうどその頃、私も同研究所入学したばかりであった。当時は、ほとんど男性の聖職者ばかりで、その勧めもあって、カトリックになる決心をされた。私もその式に招待された。

その後、幾たびか修道会に入会を試みられたが、それは果たすことができなかった。

しかし、日本にいた太田道子さんには仕事があった。

それは第2バチカン公会議が呼びかけるエキュメニズム（教会一致運動）に呼応して、「主」の御名「イエズス」を廃して「イエス」に統一することになった『聖書新共同訳』（日本聖書協会、初版1987年）の完成に貢献するということだった。

この日本語訳聖書の完成に向けて、1960年代後半から日本における主な教会の指導者や聖書の専門家が協力して、まず新約聖書は完成していたが、膨大な旧約聖書をいかに完成するか、1980年代になっても問題であった。

最終的に編集するのは、左近淑先生、木田献一先生、それにカトリックの和田幹男と太田道子さんの4人ということとなった。



左奥：太田道子さん 右手前：和田幹男師

ところが前の３人は、それぞれ本務校の教授でもあり、新共同訳のために専念することはできなかった。

このような時に、新共同訳の完成のために白柳枢機卿が太田道子さんを推薦され、そのおかげで旧約聖書の翻訳が完成した。

太田道子さんが全生活をかけて聖書翻訳に専念するためには、聖書協会の研究室は不十分であった。信州の妙高にある「竜の子ペンション」や北海道の「トラピスト修道院」に泊まり込んで翻訳作業に打ち込んだ。そこに我々３人も呼ばれて、共同作業を行った。

また国語や文章表現の観点から、特に小川国夫氏に来ていただき、助言をいただいた。

太田道子さんは、強い性格の持ち主で、そのため協力者と衝突することもあったが、大きな仕事を成し遂げるためには必要な人物であった。

Requiescat In Pace. 安らかにお休みください。





志葉 玲さん講演会を終えて

大阪梅田教会社会活動委員会 吉澤 由喜

2月12日、大阪梅田教会社会活動委員会主催の講演会を開催しました。講師として、フリーランスジャーナリストで、イラクやウクライナ、ガザ地区などの戦地に実際に取材に行かれたことのある志葉玲さんをお迎えしました。

多くの皆さんが、ロシアによるウクライナ侵攻やイスラエルのガザ地区への攻撃の悲惨なニュースに心を痛み、一日も早く戦争が終わって欲しいと願っておられると思います。また、この負の連鎖を終わらせるために一体何ができるのだろうか？と、ご自分に問いかけてきたことと思います。何かヒントをいただけたと考え、戦地でのご自分の体験と戦争に対するご意見を志葉さんにお話をさせていただきました。

志葉さんの口からまず出たのは、世界の『分断』ということでした。世界の主導権を握る大国のリーダーらが、自分たちの都合や利害関係を優先させる好き嫌いから今の戦争は起こってしまっているのだということです。ただ、歴史的・民族的背景や国同士の関係性など、色々な状況が複合的に重なり合って戦争に至っているのです、一つのテーマにとらわれず、他の問題とどう関わっているのか？ということも私たちは見ていかなければなりません。

志葉さんが取材中に知った、ロシア人の女性と結婚しロシアに暮らしていたウクライナ人の男性が、「ウクライナの為に何かしたいと考え故郷に戻ってきたが、ロシア兵が憎くてたまらない。殺したい気持ちになる」と、志葉さんに話したそうです。それこそ、その彼の気持ちの中に、分断が起きてしまっています。愛する奥さん・親愛なる祖国、どちらかを選択しなければいけないとしたら、彼の心に平和な答えがあるのかなと、私は、とても胸が痛くなりました。

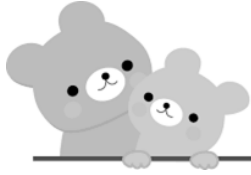
また、パレスチナの人々はこれまでもずっと苦しんでおり、ガザに対する攻撃も昨年10月に始まったことではないのです。ガザで暮らす人たちは、子どもが多く、笑顔を絶やさない、愛すべき人達だそうで、日本から取材に来た志葉さんを『ヤバニー』（アラビア語で日本人）と言って明るく迎え入れてくれたようです。志葉さんは、2014年取材に行った時がガザの最悪な状況と感じられていたそうですが、死者やけが人、破壊された建物などの数字からして、今この瞬間の方がはるかに激しく悲惨な状況と言えるそうです。

イスラエルが国際的な人道ルールを無視して、狭い土地の中にいる多くの民間人や国連関係の施設、病院、学校などを無差別的に攻撃している事は、本当に許せません。

今まで、イスラエルの暴走を誰も止めようとしてこなかったのは、国際社会の責任です。

志葉さんも、『国際人道法を守れ！』と強く主張されていました。

最後に、「今こそ、日本国憲法の前文に基づいた平和外交が強く求められている」と締めくくられました。戦争を放棄した日本こそが、外交政策を見直して、平和な世界を発信していける国であり続けていきたいです。



【シナピスニュース アンケート】のご報告

「シナピスニュース」についての、アンケートをお願いしたところ、建設的なご意見をたくさんいただき、スタッフ一同励まされました。

また同時に、改善すべき点にも気付かせていただきまして、ありがとうございました。

今後の参考にさせていただきます。

いただきましたご意見の中から、いくつかをご紹介します。



◆記事について

- 人権問題を中心に関心を持っています。
- 経口中絶薬の件は、教会のジェンダー問題にも繋がる話だったかと思います。
シノドスと合わせて別の角度からでも良いので、継続して取り上げられると良いと思いました。
- ずいぶん前から気になるのは、シナピスニュースが薄くなっていることと、もっと幅広いジャンルと内容の充実を期待したいです。
- ニュースレター2月号での「パレスチナ特集」では、たくさんのページを割いていただき、また、この上ない内容で、悪化の一途をたどる現地の状況に憤りを覚える毎日ではありますが、この企画には本当に嬉しく思いました。
できる限りたくさんの人たちに読んでいただけることを望むばかりです。
- 本日の志葉玲さんの講演会、私は途中からの参加でしたが、素晴らしいお話を伺うことができました。歯に衣着せぬ話しぶりで覇気のあるお人柄が印象されました。ありがとうございました。
- 神父様はじめ各グループの方々の記事を読ませていただき、国内だけでなく、グローバルな視点で子どもたちを取り巻く社会を見つめて、保育につなげていくことの大切さを学んでいます。
- いつも、楽しみに読んでいます。特に署名・寄付先が載っていると協力できるので有難いです。
小さな力でも、あきらめないで続けることが大切だと思わされます。

◆送付について

- 郵送でなく、メールに「添付」が良いと思う。
「諸宗教対話」の案内はポスター等もメールに添付で来ていますが。
- 毎回 手元に届くのが月初より数日遅れるので、到着時には終わっているものもあって、残念です。送付されたもので、日時が合えば参加したいと思っています。
- 内容が偏っていて、同じ人のものが毎回あります。もっと幅広いものが必要なのでは。



今後も神様の愛がすべての人に及び、平和な社会を築くことができますよう、メッセージや情報を提供させていただきますので、よろしくお願いいたします。

アンケートへのご協力、ありがとうございました。

地上でもっとも小さいといわれている種子、それがシナピス（からし種）です。

イエスは神の愛がすべての人におよび、互いに尊重し合い、愛し合うように願って平和の種をまき、やがて鳥が巣をつくるほどの大きな木になると約束しました。

シナピス年間テーマ～「平和を目指してともに歩もう」～

シナピスの風

*掲載行事はコロナ感染症の影響で延期または中止になることがあります。ご参加の際は連絡先にお問い合わせください。 第165号 2024年3月1日発行

3月の祈り

感謝

慈しみ深い父よ、温かくわたしたちの歩みを見守ってくださることに感謝します。毎日多くの問題に覆われているわたしたちは、周りに存在している善を見る目を、失う危険にいつもさらされています。苦しんでいる人に、多くの人々が、差し伸べている手を支えているあなたの愛を、見る目をわたしたちに与えてください。その中で、慰め、希望、励ましを、与えられている人々の喜びを、自分のものとして受け止め、あなたを賛美し、あなたに感謝します。周りに存在している苦しみを心にかけ、これを生み出している現状を変えるために、貢献している多くの人々と共に歩む決意を、新たにします。わたしたちの祈りを聞いてください。アーメン。

シナピスホーム

★毎週土曜日 13時ごろ～16時ごろ

3月の開催：2、9、16、30日

★月1回ランチ 11時ごろ～16時ごろ

3月23日(土)

支援のお願い 感謝

日持ちのする食品、ハラル食品、食用油、米、カップ麺、テレホンカード、などのご支援をお願いいたします。



カトリック大阪高松大司教区 社会活動センター シナピス

Tel 06-6942-1784 Fax 06-6920-2203

URL: <https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

シナピスってなあに？

ウエルカム シナピス デイ

大阪高松大司教区の発足にあたり、旧大阪大司教区の社会活動センターとして活動してきた「シナピス」が、旧高松司教区のみなさんと共に歩んでいくための交流の場を設けます。シナピスの設立から現在までの活動を紹介する展示と紹介をします。関心を持っておられる方、どなたでも是非、どうぞおいでください。

会場：カトリック大阪高松大司教区本部事務局

103会議室

3/20日

12:00～15:00

皆さまお越しください

シナピス20年の歩み
シナピス工房、シナピスホームご案内
お茶とお菓子

心が痛い！

国際情勢に関心を持とう！

モザンビークに ついて 戦争・家族の話

日時

3月17日(日)

午後2時～

会場

カトリック
泉佐野教会

講師

イポリト・
ヴィダ神父



《アクセス》

南海南海泉佐野駅から南海バス、大阪体育大学前行きに乗車。JR熊取駅から南海バス泉佐野駅前行きに乗車。
ダンバラ公園前下車。徒歩400m

- 参加費：無 料
- 主 催：岸和田地区宣教評議会社会活動委員会
- 共 催：カトリック大阪大司教区社会活動センター・シナピス
- お問い合わせ：泉佐野教会 目良幸子
連絡先 090-5671-7535

今後の活動

井戸のための募金活動

目標 50万円



「点訳版」「音訳」
ご希望の方はシナピスまで
お申込み下さい。

活動へのご支援ご協力を
よろしくお願いいたします。

郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪大司教区シナピス

難民移住者への支援物資提供も

よろしくお願いいたします。

米、ハラル食品、レトルト食品、油、
テレフォンカード、レトルトご飯、缶詰

お電話をお待ちしています！！

☎06-6942-1784



シナピス公式

さまざまなお知らせや情報を発信！

友達追加は 📱 QR コードから 📱



◀◀◀ HP はこちらから

<https://sinapis.osaka.catholic.jp/>

ニュースレター配布停止ご希望の方は
シナピスまでお知らせください。

あとがき

年始早々、聖書学者の太田道子さんが亡くなりました。太田さんはシナピスの前身のひとつである、「平和の手」の事務局長をされていました。長年、聖書を研究されるとともに、パレスチナや中東の人々の支援を続けてこられました。あらためて著書を読み返していると、教会で社会活動に関わっていくためのエネルギーが湧いてくるような感覚になります。それはひとつひとつの言葉の背後に、支援の現場での体験から紡ぎだされた力を感じるからかもしれません。

シナピスはカトリック教会における社会活動センターです。ですから毎年の事業計画には、「難民・移住者支援」や「社会活動委員会との連携」などの諸活動とともに、「社会活動の羅針盤となる霊性の涵養」という項目を記載しています。黙想会を開いたり、会議の冒頭で聖書を読みあったりして、つねに祈りとみ言葉を活動の基盤にすることを大切にしています。太田さんの訃報に際して思うことは、活動を通して体験したことや、そこから得られた気づきなどを、もっと共有していきたいということです。そんな分かち合いが、お互いの霊性の涵養につながるのかもしれませんが、私たちが行き詰まった時に、「まだ大丈夫」と活路を開いてくれる力にもなるのでしょうか。(I)

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

◆広報活動

- ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等
社会活動の指針の伝達
- ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ
機関誌としてシナピスニュースを発行

◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携

◆学習会研修会の企画

◆こども基金

世界・日本のこどもたちへの援助

◆日本カトリック司教協議会との連携

正義と平和協議会、難民移住移動者委員会、
カリタス、部落差別人権委員会に委員を派遣

◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ

◆難民移住移動者支援

難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して

難民移住移動者 相談ダイヤル

☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22

カトリック大阪高松大司教区事務局



●公共交通機関ご利用の場合

JR 森ノ宮駅より 約1000m

地下鉄中央線森ノ宮2番出口より 約800m

JR 玉造駅より 約1000m

地下鉄長堀鶴見緑地線玉造1番出口より約800m

●車でお越しの場合

阪神高速13号東大阪線法円坂出口

法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

☐郵便振替 00960-7-61419

加入者名 カトリック大阪大司教区シナピス

☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958

カトリック大阪大司教区 シナピス

代表役員 前田万葉

☐オンラインはこちら ➡➡➡

